

100周年記念号によせて

一つの組織が、100周年（Centennial）を迎えるのはよほどのことである。それも、漫然と存続してきた日時ではない。ごく少数の知恵ある有志の活動で始まった教育機関が、どこに出ても恥ずかしくないユニバーシティと言える存在にまで、進化と発展を遂げながらの一世紀という時間は、そこに所属する大学人としても誇るべきだろう。上智大学経済学部は、1913年（大正2年）に大学本体が設立されたと時を同じく「商科」として誕生し、この100年の歴史を上智大学そのものと共有してきた。その意味では、本学の知と精神の中心に常に寄り添うがごとく存立してきたと言ってもいい。

本書は、この記念すべき年を祝うことを目的とし、本学部で現役として研究・教育に携わっている教員が、すでに退職された名誉教授のご協力も得て、それぞれの分野の研究成果を持ち寄ることで、上智大学経済学論集の特別号を編んだ論文集である。経済学科と経営学科という二つの異なるディシプリンにまたがる学部の特質を反映して、金融・公共政策・都市経済・開発経済・国際経済から経済史や統計学に至るまで、経済学という学問の全般を網羅し、また、経営戦略論・国際経営論・労務管理論・イノベーション論・マーケティング・ファイナンス理論といった、経営学の主立った領域をカバーする浩瀚な論文集となった。若手の研究者から熟達の域に達した長老の碩学まで、総計23の論文を収録するに至ったことを心から多としたいと考えている。

本学部が記念論文集を発行するのは、「創立50周年記念号」（第9巻2号、1962年12月）、「70周年記念号」（1985年3月）、「75周年記念号」（第33巻第2号および第34巻1・2号合併号、1988年3月、89年3月）について、これで4度目である。記念号の発行は、その時々を経済学部の状況を表していよう。高度経済成長のはじまりを予感するかのように編纂された「50周年記念号」を嚆矢とし、80年代の2つの論文集は、後にバブル経済と呼ばれるようになった、日本経済のまさに絶頂期に相次いで出版された。いま振り返れば、その後に大きな記念の論文集を編むことに、われわれがいささかの躊躇いを抱いていたとすれば、巷間言われる「失われた20年」の経済的停滞の時代と重なっていたからだろうか。それぞれの教員は、所属する学会や海外の研究機関において精力的な教育・研究活動を続けている。しかし、100周年という記念の年を「研究論文」の編纂という形式で共に祝いたいと思うようになったのは、停滞の時代の断末魔のような

政権交代の呪縛がようやく終わりを告げ、経済と時代の新たな節目の到来を予感しているからなのかもしれない。

日本経済にとって試練が続いたこの20年間は、上智大学経済学部にとっては大きな変化の時代でもあった。それは二つの事柄に集約される。第一に、大学が定めた退職年齢の引き下げを契機に始まった教員の大幅な若返りであり、いま一つは、新任人事の採用に完全公募制を導入したことである。とくに後者は、上智大学のどの学部でも実行されていなかった新機軸であった。このことによって、学部の研究と教育の水準は、かつてないほどの高みに登ることができた。正直に記すならば、記念論文集は、われわれ研究者にとっては理想的な研究発表の場ではない。それにもかかわらず、ここに参加することは、知識の世界に生きることを生業とする、われわれ教員の責務と矜持の表れだと受け取っていただけると幸いである。

苦難の20年の後に未曾有の震災を経験した我が国は、もはやキャッチアップ型の経済を完全に脱し、本格的な高度知識基盤社会に突入している。本書が、そのような新しい時代への一つのオマージュとなればこれに勝る喜びはない。またこの機会に、つねづね多大の支援をいただいている、経済学部同窓会の経鷺会をはじめ多くの関係者に感謝の意を表するとともに、今後も一層のご支持を賜りたくお願い申し上げる次第である。

2013年1月吉日記す

上智大学 経済学部長
上 山 隆 大